

## 2022年第30回「世界病者の日」教皇メッセージ

「あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたもあわれみ深い者となりなさい」

(ルカ 6・36)

愛の道にあって、苦しむ人の傍らにいる

親愛なる兄弟姉妹の皆さん

30年前、聖ヨハネ・パウロ二世教皇が世界病者の日を制定したのは、神の民、カトリック医療施設、そして市民社会が、病者と彼らのケアにあたる人々の支援の必要性への認識を高めるためでした<sup>1</sup>。

この間、世界中の地方教会で実現してきたことを、主に感謝します。さまざまな進展がありました。すべての病者が、なかでも貧困と排除のもっとも激しい地域や状況にある人々が、必要な医療ケアを受けられるようになるには道半ばです。また、十字架につけられ復活したキリストと結ばれて病の時を過ごせるような司牧的同伴も十分ではありません。第30回世界病者の日——その締めくくりの祭儀は、パンデミックのためにペルーのアレキパではなくバチカンのサンピエトロ大聖堂で行われます——を通して、病者とその家族への奉仕と寄り添いを深めることができますように。

### 1. 御父のようにあわれみ深く

今回の第30回のテーマとして選ばれた「あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたもあわれみ深い者となりなさい」(ルカ 6・36)は、まずわたしたちの視線を「あわれみ豊かな」(エフェソ 2・4)神に向けさせます。いつだって子らを、たとえ子どもたちが背を向けようとも、父の愛で見守ってくださる神です。まさに、あわれみとは神の別名であり、それは偶発的に生じる感情としてではなく、神のすべてのわざの中に存在する力として、神の本質を表しています。それは強さであり、同時に優しさでもあります。だからわたしたちは、神のあわれみには父性と母性(イザヤ 49・15 参照)の二つの側面が内包されているのだと、驚きと感謝をもって断言できるのです。神は、父の強さと母の優しさをもってわたしたちの面倒を見ておられ、聖霊によって新しいいのちを与えようと、たえず強く願っておられるからです。

### 2. 御父のあわれみであるイエス

病者に注ぐ御父のあわれみ深い愛をあかしする最高のかたは、神のひとり子です。福音書は実に多くの箇所、さまざまな病気を患う人とのイエスの出会いを伝えています。イエス

は「ガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、み国の福音をのべ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」（マタイ 4・23）のです。次のような問いがわきます。使徒は福音の告知と病者のいやしのために師から遣わされた者ですが（ルカ 9・2 参照）、なぜイエスは、使徒の宣教において第一の任務とするほどに病者に対するケアを特別視していたのでしょうか。

20 世紀の一人の思想家が、一つの理由を示唆しています。「痛みはまったき孤立をもたらし、まさにこのまったき孤立から、他への訴え、他への嘆願が生まれる」<sup>2</sup>。病によって肉体のもろさや苦しみを味わうと、心も沈み、不安がつり、次々と疑問がわいてきます。起きること一つ一つの意味を問い、すぐに答えを得ようとしします。これについては、今回のパンデミックにおいて、集中治療室で孤独に末期を迎えた多くの患者を思い出さずにはいられません。もちろん、献身的な医療従事者たちのケアを受けてはいましたが、最愛の家族や、現世での生活でいちばん大切だった人たちとは離されたままでした。だからこそ、御父のあわれみであるイエスの模範に倣って、病者の傷になぐさめの油と希望のぶどう酒を注ぐ、神の愛のあかし人<sup>3</sup>の存在が重要なのです。

### 3. キリストの痛みを負うからだに触れる

御父のようにあわれみ深い者となりなさいというイエスの呼びかけは、医療従事者にとって特別な意味があります。わたしが考えているのは、医師、看護師、検査技師、病者の介助や介護のスタッフ、そして苦しむ人のために貴重な時間を割いてくれる多くのボランティアのことです。親愛なる医療従事者の皆さん。愛と技能をもって病者の傍らで務めておられる皆さんの奉仕は、職業という枠を超え、使命となるのです。キリストの痛みを負ったからだに触れる皆さんの手は、御父のあわれみ深いみ手のしるしとなるはずです。皆さんの職業の特別な尊さと、そしてそれに伴う責任とを、どうか心に留めておいてください。

医学の、とくに近年の進歩の恵みを、主に感謝しましょう。新たな技術によって数々の治療法が開発され、患者に大きな利益をもたらしています。古いものから新しいものまで、さまざまな病気の撲滅に貴重な貢献をなすべく、研究が続けられています。リハビリ医療は、その知見と技能を著しく発展させてきました。だからといって忘れてはならないのは、患者それぞれが、その尊厳と弱さを含めて唯一無二の存在であることです<sup>4</sup>。患者はつねにその人の病気よりも大切に、だからこそ、どのような治療法も、患者の話に、これまでのこと、懸念、不安に、耳を傾けないままなされてはなりません。回復の見込みがない場合でも、ケアはつねに可能であり、なぐさめを与えることはつねに可能であり、病状にではなくその人に関心を示しているという寄り添いを感じてもらふことはつねに可能なのです。ですから

医療従事者には、専門課程の間に、患者に傾聴するすべと、患者とのかかわり方を身に着けることを期待しています。

#### 4. ケアにかかわる施設——あわれみを表す家

世界病者の日はまた、ケアにかかわる施設に着目するにもよい機会です。何世紀にもわたり、病者へのあわれみに駆られてキリスト教共同体は、無数の「よいサマリア人の宿屋」を開設してきました。そこに迎えられケアを受けることができるのは、あらゆる病気の患者たち、とりわけ貧困や社会的排除から、あるいは特定の病状から治療が困難で回復が見込めない人たちです。そうした状況では、子どもや高齢者、そしてもっとも弱い立場の人たちの負担がもっとも多くなります。多くの宣教師、御父のようにあわれみ深い者たちは、福音をのべ伝えつつ、病院や診療所やケアする施設を建設していきました。どちらもが尊い事業であり、二つを通してキリスト者の慈善の愛は具体化し、弟子たちによってキリストの愛があかしされ、信用を得ていったのです。とくにわたしが思い起こしているのは、地球上でもっとも貧しい地域の住民のことです。そうした地域では、リソースは限られてはいても、可能なことはすべてしてくれる医療施設にたどり着くのに、長距離を移動しなければならないことも多々あります。この先もやるべきことはあり、十分な治療を受けることが贅沢でしかない国もまだあります。貧困国では新型コロナウイルスのワクチンが入手できないことや、さらにいえば、もっとずっと一般的な薬で対応できる病気が治療できないことが、その顕著な例です。

この文脈において、カトリックの医療施設の意義を今一度訴えたいと思います。それらは保護され維持されるべき貴重な宝です。もっとも貧しい病者と、完全に見捨てられた境遇に寄り添うことで、その存在は教会の歴史を浮き彫りにしてきました<sup>5</sup>。医療を受けられない兄弟姉妹、あるいは十分なケアを得られない兄弟姉妹の叫びに耳を傾け、彼らに奉仕するために身をささげてきた修道会創設者が、どれほど多くいたことでしょうか。現在もなお、先進国においてさえ、その存在は恵みであります。必要なあらゆる専門性を踏まえた身体のケアに加え、患者とその家族を第一の関心事とする愛も、つねに差し出しているはずだからです。使い捨ての文化が広がり、必ずしもいのちが、歓迎され生かされるに値するものだと認められていない今日、あわれみを表す家であるこれらの施設は、すべての人間の生命——もっとも弱い存在であろうとも——をその発生の瞬間から自然な死に至るまで、保護し世話をする模範となりうるのです。

#### 5. 司牧におけるあわれみ——いること、近しくあること

ここ 30 年で医療司牧（パストラルケア）は、必須の奉仕としての認知度が高まったと思います。貧しい人——病者は健康状態において貧しい人です——が苦しむもっともひどい差別が霊的配慮の欠如なら、わたしたちは彼らに対し、神の寄り添い、神の祝福、神のことば、秘跡の執行、信仰における成長と成熟の道への促しを差し出さずにはなりません<sup>6</sup>。これについて、皆さんに覚えていてほしいことがあります。病者に寄り添うことや、彼らに対するパストラルケアは、専門的にそれに従事する一部の牧者だけの務めではないのです。病者を訪問することは、キリストからのすべての弟子に対する要請です。自宅で訪問を待つ病者や高齢者は、どれほど多いことか。なぐさめという奉仕の務めは、「わたしが……病気のときに見舞（つてくれた）」（マタイ 25・36）というイエスのことばを心に留めながら行う、洗礼を受けたすべての人の責務です。

親愛なる兄弟姉妹の皆さん。わたしはすべての病者とその家族を、病者のいやし手、マリアの執り成しにゆだねます。この世の痛みを身に受けておられるキリストと結ばれて、意義となぐさめを見だし、自信をもつことができますように。すべての医療従事者のために祈ります。彼らがあわれみ深い者となり、患者に対する適切なケアだけでなく、兄弟愛からの寄り添いに努めることができますように。

すべての人に、わたしは愛を込めて使徒的祝福を送ります。

ローマ

サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂にて

2021 年 12 月 10 日

ロレトの聖母マリアの記念日

フランシスコ

（カトリック中央協議会事務局訳）

---

1 教皇聖ヨハネ・パウロ二世「世界病者の日制定のための、保健従事者評議会議長フィオレンツォ・アンジェリーニ枢機卿あて書簡（1992 年 5 月 13 日）」参照。

2 エマニュエル・レヴィナスはこれを「苦しみの倫理（Une éthique de la souffrance）」（*Souffrances. Corps et âme, épreuves partagées*, J.-M. von Kaenel edit., Autrement, Paris 1994, pp. 133-135）という。

3 『ローマ・ミサ典礼書（イタリア語版）』叙唱—共通 8「よいサマリア人であるイエス」参照。

4 教皇フランシスコ「イタリア医科大・歯科大連盟でのあいさつ（2019 年 9 月 20 日）」参照。

5 教皇フランシスコ「ジェメッリ総合病院（ローマ市）訪問時のお告げの祈り前のあいさつ（2021 年 7 月 11 日）」参照。

6 教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び（2013 年 11 月 24 日）』200 参照。